Kwansei Gakuin University

原始教会におけるペテロとパウロ

―ガラテヤ二・七、八における「ペテロ」の名の伝承史的、編集史的考察を中心として―

小林昭雄

一　問題の所在
二　主要な解釈の歴史
三　パウロの歴史的状況と神学的意図
一　ペテロの権威に関するユダヤ主義者たちの主張
二　ユダヤ主義者たちのペテロ観に対するパウロの批判
三　ペテロと同等な使徒職の主張

一　問題の所在

原始教会においてペテロはどのような地位を占め、また如何なる役割を演じたか。特にパウロとの関係はどのようなものであったろうか。この問題はペテロがキリストの死後、全使徒、全教会の頭とされ、終生指導的地位を占め、

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

全教会に対して教導権を行使したとするローマ・カトリック教会の主張との関わりの中で、[1] 長い間原始教会史と新約聖書神学の問題であった。

この問題に関してはパウロの手紙が最も重要な資料となるであろう。何故なら㈠パウロ自身が使徒であり、彼はペテロとも個人的な面識を持っていたから（ガラテヤ一・一一―二・二二）。㈡ガラテヤやコリント教会の反対者たちはペテロを権威として引合に出しながらパウロの使徒としての権威を非難した。これに対しパウロはその委ねられた福音を守り、教会を異った教えとそこに生ずる混乱から救うためこのような誤解と対決し、屢々ペテロと自己自身の使徒職について言及している（ガラテヤ二・八―、一一―、一コリ一・一二、三・二一―、九・五―、一五・五―）。㈢新約聖書の中でパウロの手紙は使徒によって書かれた最古の文書である。これに反し他の文献は使徒後の人物によって書かれ、前者の方が当然資料としては信憑性が多い。

ではパウロはペテロの使徒職、特に自己との関わりをどのように理解したであろうか。ペテロを自分よりも優位におかれ、指導権を持つ使徒、或は反対に使徒の名に値いしないもの、偽使徒の如く考え、その使徒としての権威を全く無視、または軽視したのであろうか。これらの問題は宗教改革以来、ローマ・カトリック教会との論争、対話の必要から、新約聖書の学問的研究の歴史の中で長く議論されて来た興味ある問題であるがここでは広く立ち入って議論する余裕はない。ただこのような問題を考慮に入れながら、ガラテヤ二・七、八における「ペテロ」の名前の用法とその意味に関して検討することにする。私見によると、ガラテヤ二・七、八は原始教会における「ペテロ（岩）」の名の用法と意義を知る上でマタイ一六・一六―一九にまさるとも劣らぬ重要性を持っている。[2] それにもかかわらずこの箇所がそういう視点から殆ど注意を払われず、もっぱら他の箇所特にマタイ一六・一六以下に関心が向けられて来

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

たのは不思議という他はない。

それではガラテヤ二・七、八における、ペテロの名前に関する問題点は何か。それは、パウロは他のすべての箇所—コリント人への第一の手紙の中で三回（一・一二、九・五、一五・四）ガラテヤ人への手紙の中で四回、しかも二・七、八の直前と直後に（一・一八、二・九、一一、一四）—では常に「ケファス」とアラマイク名を用いているのに、ガラテヤ二・七、八においてのみそのギリシャ語名「ペテロ（岩）」を用いていることである。[3] では何故ここにだけペテロを用いたのであろうか。これは写本を写した際の間違いによるものか、単なる偶然にすぎないものか、それともその背後に何か歴史的、神学的理由があるのであろうか。この問題に関し、従来いろいろの説明が試みられて来たが、何れも説得的であるとはいえないように思う。そこで以下に先ずこれらの解釈を批判的に紹介し、次に新しい視点から、パウロの置かれた状況と彼の神学的モティーフを考慮に入れて検討を加えて見たい。

二　主要な解釈の歴史

上述の如く、パウロがこの箇所でのみ、しかもその直前（一・一八）と直後（二・九、一一、一四）で「ケファス」を用いながら、全く突然に「ペテロ」という名を用いているのは不思議な現象といわざるをえない。この突然の変化の説明として従来主として次のような解釈が試みられて来た。

一　写本上の原因に帰するもの、例えば

(イ) 本来は「ケファス」であったものが、校訂本において「ペテロ」に変えられたとするもの。[4] しかし、そのような異本は見当らず、当初から現在のテキストの通りであったことが写本上確かでありこの説は承服しがたい。[5]

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

(ロ)後代の加筆者がペテロとパウロの類似、相等性(parallelism)を強調しようとしてここに挿入したと考えるもの。[6] しかし、このような両者の類似、相等性の強調はパウロ自身の傾向であり(ガラテヤ二・九、一一―、一コリ一・一一―、九・五等)[7] この節はむしろ彼自身の筆になるものと考えられる。

(ハ)その他何らか写本上の理由によるとしながらも具体的な解決を提示しないもの。[8]

二 ここに出て来るペテロはケファスとは異なる人物であると考えるもの。[9] しかしこれは無理である、何故ならガラテヤ二・一以下の文脈は両者が同一人物であることを示している。

三 パウロにとって「ペテロ」は異邦教会に対する伝道者としての名であり、「ケファス」はエルサレムの使徒、或は使徒職にあるものとしての名を意味したとする説。[10] しかし、パウロはコリント人への第一の手紙の中では常にケファスを用いており、しかもそこでは常に伝道者としての彼を考えている。[11] さらに、パウロがこの箇所(二・七、八)でペテロと呼ぶ場合、「ペテロを単に伝道者としてではなく「割礼ある者への使徒」として考えていることは確かである。

四 コリント人への第一の手紙の中で終始ケファスを用いているのは、一六・二二のアラム語「マラナ・タ」からも分かる如く、アラム語を母国語とするペテロ党に対する考慮からであり、ガラテヤ二・九でもユダヤ人を考慮しているためである、との説。[12] しかし、それではパウロは何故二・七、八でのみユダヤ人を考慮せず、ギリシャ語名を用いているのか説明出来ない。

五 パウロはマタイ一六・一六以下に見られるような、ペテロの告白とそれに対するイエスの約束に関するギリシャ語で書かれた資料を知っており、そこから引用しているか、或はその影響の下でこの箇所を書いたためとするもの。[13]

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

しかし、ムンクも指摘する如くペテロの召命や命名に関する伝承は現在の福音書に示されている如く多様であり（マタイ一六・一六―、四・一八―二〇、マルコ一・一六―一八、三・一六、ルカ五・一―一一、一二・一三―、ヨハネ一・四二、一二・一・一・一九）[14]、マタイ一六・一六以下も福音書記者の意図的編集によるものと考えられ[15]、パウロが何かの伝承資料を引用していると簡単に想定することは出来ない。

六　パウロはディアスポラに向けて記された、アラム語からギリシャ語に翻訳された使徒会議の議定書から引用しているとするもの。これは特にペテロの問題に関心を持つ二人の学者、クルマン[16]とデインクラー[17]により各独立して提唱された。後者によると、パウロはペテロと並んで自分の使徒職がエルサレム使徒たちによって認められたことを公表するために、その議定書をこの二・六―一〇に引用している。そのため、公文書にあるペテロの公の名を自分の常用していたケファスに書きかえず、そのまま記したのであろう、という[18]。しかし、デインクラーは注意深く、この仮設はさらに十分な根拠づけを必要とすることを認めている。さらに彼は、エルサレム会議協定書からのギリシャ語が初期において広く伝わったので、シモンがケファスに、さらにそこからペテロに変っていった歴史的状況が忘れられていったのであろう、と推察する。

これらは興味ある仮設であるが、なお種々の難点を持っている。

(イ)ガラテヤ二・七、八もしくは二・七―九後半は次のようなパウロ独自の神学的用語や概念を多く含み、引用ではなくむしろパウロによる説明であると考えられる(a)「割礼、無割礼（ἀκροβυστία, περιτομή）」（ロ・マ三・三―参照）、福音、御言、つとめの「委託（πιστεύομαι）」（一テサ二・四、ロマ一・五、ガラテヤ一・一二、ロマ三・二、一コリ九・一七等）(b)使徒職を「恵み」（χάρις）と呼ぶこと（ロマ一・五、一二・三、一五・一五、一コリ三・一〇、一五・一〇、二コリ一二

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

・九、ガラテヤ二・九、ピリピ一・七、エペソ三・二、七以下)、(c)ペテロとパウロの類似、相等性の主張(一コリ一・一一―九・一―、三・二二、一五・五―)、(d)神による使徒としての選びと派遣、その活動を通じて起こる人々の具体的な回心、その結果としておこる信仰者の群れとしての教会の建設に示される、使徒のしるしや正当性に関する論議(σημεῖα τοῦ ἀποστόλου 二コリ一二・一二、ロマ一五・一九、一テサ一・五、σφραγὶς τῆς ἀποστολῆς 一コリ九・二、ἐνέργεια τοῦ θεοῦ 一コリ一二・六、ガラテヤ三・五、ピリピ二・一三、一テサ二・一三)。

以上の理由から可成りの学者がすでにガラテヤ二・七―九後半をパウロによる説明とみなしている。[19]

(ロ)もしエルサレム使徒会議の議定書が初期において広く流布していたとすれば、パウロは彼の使徒職に対する嫌疑にあれ程苦しむ必要がなかったのであるまいか。またパウロは他のどこにもそのような議定書を引用して彼の使徒職を弁護しようとしていない。

(ハ)G、クラインはその師であるディンクラーの立場を弁護し、これが殆ど決定的な仮設であるという。[20] 彼は「少くともガラテヤ二・七前半において、使徒職がペテロに対して一方的に保留されているのはこの箇所が使徒会議の議定書であることを示しているかも知れない」という。[21] しかしそれでは、何故パウロは自己の使徒職が問題にされているガラテヤ教会の状況で、そのような不利な公文書を引用したのか説明出来ない。実際ガラテヤ二・七前半は、ペテロにのみ一方的に使徒職を保留するかの如き解釈をゆるすものではない。[22]

七 こうして最後に考えられることは、ギリシャ語を語るガラテヤ教会の中でパウロは、彼に対する反対者が用いていたペテロ(岩)の名前をあえて意識的に引用し、彼独自の解釈を加えつつ彼らの誤解を訂正しょうとしたのではあるまいか、ということである。では何故パウロはそうしたのか、またそのようにしなければならなかったのであろ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

うか。彼の置かれた歴史的状況と神学的意図とを次に考えて解決を見出してみたい。

三　パウロの歴史的状況と神学的意図

一　ペテロの権威に関するユダヤ主義者たちの主張

ガラテヤ人への手紙はその冒頭から烈しい怒りと驚き、悲しみのこもった、論争的調子にみちている。そこにはパウロの去ったあと、ガラテヤ教会に入り来り、「異なる福音」「パウロたちの宣べ伝えた福音に反すること」を宣べ伝え、福音の真理から逸脱させようとする人々、いわゆるユダヤ主義者がパウロに対する反対者として存在した。これらの人々はガラテヤ一―二章によると次の如く主張していたようである。

(イ)彼らは自分たちの教えを正当化し、パウロの福音の権威を失墜させ、異邦人キリスト者に割礼を強要するために、ペテロやエルサレム教会の指導者たちを引合に出している。

(ロ)彼らはペテロや他のエルサレムの「柱」といわれる人々の名声や曾ての経歴や業績(οἱ δοκοῦντες, ὁποῖοί ποτε ἦσαν)を、パウロの過去や名声と比較対照してその権威を強調し、これに対しパウロが取るに足らぬ者であることを宣伝している。「彼らが何であったか」[23]ということは彼らの特質、過去の経歴(キャリア)等、彼らの名声の基礎となるものを意味している。それ故これは、彼らがイエスの弟子であったとか、ヤコブの如くイエスの兄弟としてイエスを知っていたとかいうイエスとの特権的関係、またキリストの復活後最初の教会における彼らの活動や、与えられた指導的地位や役割がエルサレム教会によって尊敬され、さらにこのことがガラテヤのユダヤ主義者たちにより、パウロがペテロたちに劣ることを示す材料として強調されたようである。[24]

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

(ハ)「柱たち（στύλοι）」とか「岩（ケファス）」は単にバーレットがいうような彼らの終末論的役割を示すのみではなく、教会の内部における規範的、管理的役割をも意味した。[25] ここで「教会」（エクレシヤ）は単にエルサレム教会を意味するのみでなく、キリストの全教会を意味した。そこで、彼らを教会の柱また岩とよぶことにより、柱としての権威と機能をペテロ、ヤコブ、ヨハネに、岩としてのそれをペテロに限定しその結果パウロをそこから必然的に排除する結果となった。[26] ユダヤ主義者たちがパウロに対してこれら指導者たちの権威を如何に強調し、これを引合に出してパウロとその福音を軽視しようとしたかは、これら指導者たちに対するパウロの使徒職の独立性の主張と、パウロが彼らに従属するかの如き誤解に対する烈しい反論的口調から明白である（一・一一―一七、一九、二・六、七―九、一一）。

(二)パウロの反対者たちはエルサレムの指導者たちがパウロの上位にある、規範的拘束力を持つ制度であり、パウロはこれに従属すべきものであることを示す証拠として、次の如き歴史的事実を挙げたであろう。即ちパウロがキリスト者となったのは彼らより遙かに後であること、エルサレムの指導者たちに対する彼の歴史的関係、例えばパウロの数度のエルサレム訪問や、彼がエルサレムまで上って福音を「柱」といわれる人々の前に提示した事実など。

(ホ)パウロの反対者たちは、「柱」といわれる人たちが、あたかも不可侵的な権威であるかの如く考え、これに依拠していたようである。この点はガラテヤ二・一一以下、一・八以下、二・六以下、五・一〇におけるパウロの批判的論争的態度から十分うかがい知ることが出来よう。そこには彼らの、「柱」といわれる人たちがその職務にあたって（ex Cathedra）決定することは何ごとであれ規範的権威を持つ、何故なら彼らはキリストによりその地位に任命されたのだから、という如き権威概念がすでに存在していた如く見える（マタイ二三・一以下、モーセの座参照）。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

二　ユダヤ主義者たちのペテロ観に対するパウロの批判

パウロはこのような考えを鋭く批判し、これに反対している。

(イ)パウロはガラテヤ一・一―二・二にペテロ及びエルサレムの他の指導者たちとは全く無関係に復活のキリストから直接に使徒としての召命を受けたという。彼は自分の意志で使徒となったのでもなく、エルサレムの使徒たちを含めて人間に教えを受けてなったのでもない。彼はキリスト教会の熱心な迫害者であった故に、そのようなことはありえないことであった。またその召命後もエルサレムの使徒たちに教えを受ける必要もなく、召命後十数年（十四または十七年）もの間その伝道を彼らとは全く独立し、また何らの干渉を受けることもなく遂行した。その後エルサレムの指導者たちと協議するためにエルサレムに上った。しかし、これは「啓示によって」であり（二・二）、エルサレム指導者たちの命令によるものではなかったと言明し、あたかも彼がペテロを始めエルサレムの指導者たちに隷属しているかの如き誤解に反対している。[27]

(ロ)パウロは彼の福音を特に「重だった人たち」に示した、と記したあと極めて批判的、論争的なつぎのことばを意識的に附加している。「そして、かの重だった人たちからは―彼らがどんな人であったにしても、それはわたしには全く問題ではない。神は人を分け隔てなさらないのだから――事実、かの『重だった人たち』はわたしに何も加えることをしなかった」（二・六以下）。[28]

ここに、パウロは再び、あたかもエルサレムの指導者たちがパウロに優位し、パウロに福音を授けたのみでなく彼の福音を修正しうる権威を持っているかの如き誤解（一・一一以下）に鋭く反対している。

パウロは「彼らがどんな人であったにしても、それは、わたしには全く問題ではない」（二・六）という語を附加す

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ることによって、かの「柱たち」「重だった人たち」についてのユダヤ主義者たちの評価と、彼自身の評価とを鋭く区別している。反対者たちが高く評価するところのもの、即ち彼らがイエスの弟子であったとか、兄弟であったとかの彼らの経歴や過去の業績はパウロにとって全く問題ではない。何故なら、すべてのものの究極の審判者でいまし給う神は、そのような人間の経歴や過去の功績によって分け隔てをなさらないから。

パウロ自身もかっては人間的、この世的な考えに従って生き、考え、評価し、外見的なこと（πρόσωπον）をあたかも自己の功績であるかの如く誇っていた。しかし、復活のキリストにより使徒に召されて以来、彼は神の恵みの下に生きる者とされ、一切の評価の仕方は一変した（ピリピ三・一―、二コリ五・一六―、ガラテヤ六・一四）。こうしてユダヤ主義者たちによる見方、評価はパウロには何の価値をも持たない（ガラテヤ六・一四―）。そこで彼は「それは私には全く問題ではない」といい切っている。「問題ではない（διαφέρει）」という現在形により、それが彼にとって一貫した、不変の真理であることを示し、また「私には」（μοι）という語によって、これが主体的真理であることを強調している（三・一九―二一、二コリ五・一四）。

このように神は人間の表面（うわべ）を見ないで、心の奥底を言通されるのであるから、パウロはエルサレムの指導者たちが人々から受けている評判によって動かされない。また人間の評価は屢々誤まるものである。それ故大切なことは人が如何に見えるか、また何と噂されているか、という事ではなく、現実に何であるか（一テサニ・三―、ガラテヤ一・一〇―）[29]、現在、如何に神の真理に服従し、恵みによって生きているか[30]、ということである。何故なら神は外見によって分け隔てをなさらないから（三・六、ロマ二・一一、三・二三、一〇・一二―、歴代記下一九・一七、ベン・シラ三五・一三、ジュビリー五・一六）[31]。特権を与えられた過去は神の恵みであって、人間の功績ではない。故にそれによって、神の特別なひいき

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

を求め、兄弟であるキリスト者の従属を強要することはゆるされない。[32] 神の真理はすべての人間を超え、人間に服従を要求し、神は何人にも拘束されない。[33] パウロは神によってのみ拘束されている故に、すべての人間如何なる人間的権威からも自由である（一・一〇）。

(八)パウロは、エルサレムの指導者たちが何故、また如何にして彼の使徒職と彼の伝える福音の権威を承認するに至ったのか、その根拠と仕方とを特に強調している。即ち、「柱」といわれている人々はパウロの異邦人への使徒職を承認した（二・一〇）。だがそれは決して、彼らがパウロ以上の権威であり、その特権の故にパウロに対して何らかの支配権を有していたからではない。そうではなく、彼らはパウロの報告により神が彼に福音を委ねられているのを見て（ἰδόντες）、神ご自身がパウロに使徒としての恵み、使徒職をお与えになっていられることを認識した（γνόντες）（二・九）からに他ならない。こうして彼らは、パウロに対する神の召しと推薦とを見た。パウロに起っている恵みの事実が、彼らにパウロの使徒職を認めるよう迫ったのである。使徒行伝一一・一七に記されたペテロの、「このように、私たちが主イエス・キリストを信じた時に下さったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったとすれば、私のような者がどうして神を妨げることが出来ようか」という告白は、恐らくガラテヤ二・六、七にも共通する原始教会の考え方を反映しているであろう。

(二)パウロは、エルサレムの指導者たちが、パウロたちに何も加えなかったこと、「反対に」彼とバルナバとに交わりの右手を指しのべたことを強調している。彼らは「偽兄弟たち」（二・九）の反対や圧力にもかかわらず、これに抗してただ神の意志に服従した。こうして、「柱」といわれる人々は神の真理に服従することにより、自らがまさに「柱」の名にふさわしいことを示した。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

このようにして、パウロはペテロや他のエルサレム指導者たちにこの鋭い反論を向けているのではなく、ガラテヤ教会に侵入して教会を煽動した人々、またその影響で動揺しているガラテヤ人に向けているのである（一・六、五・一〇）。パウロはこれらの「柱」といわれる人々がパウロ自身と同じく神によって選ばれていることを知っており（一コリ一五・五―、ガラテヤ一・一七、二・七）、それ故に彼らの権威を認めていた。さもなければ、彼は福音を彼らに提示するためにエルサレムにも上らなかったであろうし、またパウロとバルナバや異邦教会に対するこのような有利な決定を、教会に対し規範的なものとして言及することはしなかったであろう。しかしながら上述した如く、パウロによる彼らの権威の評価の仕方は、パウロの反対者たちによる仕方とは根本的に違っていたのである。

三　ペテロと同等な使徒職の主張

以上の如くパウロは、ペテロや「柱」といわれる人々に対する誤った評価を鋭く批判するのみでなく、さらに自分が、教会の「岩」としてのペテロに同等な権威を与えられていることを主張している。彼は使徒として、単に他の使徒に劣らないのみならず、異邦人の使徒としてペテロと並ぶ役割を与えられていることを自覚している（二・七―）。ガラテヤ二・七、八における「ペテロ」の名の用法と意味とはまさにこの関連において問題となる。

既述の如く、ガラテヤ一・一一～二・二二の文脈によると、パウロの反対者たちは異邦人キリスト者を自分たちに従わせ、割礼を強要するためにパウロの福音の権威を失墜させようとし、そのためにエルサレムの「柱」といわれる人々の権威を援用している。「柱」（στύλοι）の名前は、単に高い地位にある人々を意味するのみでなく、神の宮である全教会を支えている支柱を意味する。こうして「柱」といわれる権威ある指導者のサークルは、ペテロ、ヤコブ、ヨハネに限定され、パウロは当然除外されていた。またパウロの反対者たちは、「柱」のみならず、これと類似した

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

「ペテロ（岩）」という名称をも用いていたであろう。この岩は柱と同じく比喩的用法であり、全教会がその上に立てられ、それによって支えられている岩を意味した。反対者たちはこの語をガラテヤ教会で煽動的にパウロに反対するため用い、パウロがその下に従属すべきものであることを主張していたと思われる。

このような状況の中でパウロは意図的に彼らの用いていた「ペテロ」の名を取りあげ、これに厳密な神学的な解釈を与えて彼らのペテロ観を批判的に修正し、それと共に自らの使徒職を弁護しようとしたものである。すなわち、彼は漠然として多義的で、その故に誤用され易い「ペテロ」（岩）」という名称を使徒職（ἀπόστολη）という神学的概念によって表現し、ペテロは何故また如何にして使徒となったかを説明しつつ、自己をもペテロと相並ぶ使徒として提示しようとしたのであった。「ペテロにユダヤ人への福音を委ねられ、彼の中に働かれた神が、私にも異邦人への福音を委ね、私の中にも働かれた」。このように「ペテロ（岩）」を使徒職、神の恵み（二・九）として解釈することにより、パウロは反対者たちによる法的、位階制度的な意味でのペテロの権威理解を、現実の歴史の根拠なき歪曲として徹底的に批判しているといえよう。そこで、クルマンがガラテヤ二・七―九の解釈において、ここでパウロはペテロを「全教会の指導者としてのヤコブに従属して遂行されたユダヤ人へのキリスト教伝道の組織者」として考えている。[34] というのは適切ではない。何故なら、パウロはここで、ペテロの使徒的活動と役割をクルマンの如く原始教会の法的、位階制度の観念から見てはいないし、ペテロの地位に関しその活動の前期、後期における変遷についても語ろうとはしていない。

こうしてパウロはここで、自分を単に使徒の一人、或は一二使徒に並ぶもの、或はヤコブに従属しているペテロと同等なものとして主張しようとしているのではない。[35] 彼はまさに、自らを全教会の「岩」、エルサレム教会における

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

第一の、最も重要な使徒としてのペテロと同等な異邦人への使徒であると主張しているのである。

こうして、パウロはペテロを先例として引用している。がペテロを自らの上に位するものと考えてはいない。歴史的にはペテロはパウロ以前に使徒とされた。がこの歴史的な優位は必ずしもより高い地位や権威を意味しない（一コリ一五・八）。反対にパウロはペテロの先例を、それにより人々がパウロにも異邦人に対する使徒としてペテロと同等かつ独自な使徒職を認めるべきことを迫るものとして引用している。これにより、人間的な評価でペテロを誇りパウロを軽視する反対者たちの考えを批判すると共に、ガラテヤ人に対し彼の使徒職と福音に信頼すべきことを説いているのである。

ガラテヤ二・七、八における「ペテロ」の名の用法は、この名称が教会の中で容易に人間的に、法的制度的な意味での権威として誤解され、誤用され易かったことを示している。このような誤解と誤用に対して、神の恵としての使徒職という神学的概念によりこれを是正しようとした最初の人物は我々の知る限り使徒パウロであったことを知るのである。このことは原始教会史においてのみならず、全教会史の中で特記すべきことであったといえよう。

1　ローマ・カトリックの教義によるとペテロは使徒たちのプリンスであり、パウロよりも偉大である。そこで、聖ペテロと聖パウロがその権力及び教会の統治において全く同等であるという命題は異端であるとされる。　Cf. Denzinger, *The Sources of Catholic Dogma*, trans. R. J. Deferrari (St. Louis: Herder Book Co., 1957), p. 315.

2　マタイ一六・一六―一九の解釈に関しては拙論、「マタイ福音書記者の教会観」（『聖書と教会』一九七二年九月号、二―七頁）参照。

3　福音書の中ではヨハネ一・四三のみがケファスを用い、他の箇所では全部ペテロを用いている。

4　K. Holl, "Der Kirchenbegriff des Paulus in seinem Verhältnis zu dem der Urgemeinde," *Urchristentum und Religionsgeschichte*, Ges. Aufsätze, II, Tübingen; Mohr,

NII-Electronic Library Service

1928, p. 45, A. Merx, *Das Evangelium des Matthäus*, 1902, p. 161.

5 H. Schlier, *Der Brief des Paulus an die Galater*, 1951, p. 44, n. 3, Th. Zahn, *Der Brief des Paulus an die Galater*, 1905, p. 103.

6 Barnikol, "Der nichtpaulinische Ursprung der Parallelism der Apostel Petrus und Paulus (Gal. 2: 7–8), "*Forsch.* V, 1931.

7 Oepke, *Der Brief des Paulus an die Galater*, ThHK, 1957, p. 50; H. Lietzmann, *ZNW*, XXXIII (1934), p. 93; R. Bultmann, *ThR*, N. F. VI (1934), p. 245; E. Haenchen, "Petrusprobleme," *NTS*, VII (1961), p. 193 ff.

8 J. Munck, *Paul and the Salvation of Mankind*, 1959, p. 61; A. Oepke, *op. cit.*, p. 49.

9 Clement of Alexandria, in Eusebius, *H. E.*, I, 12, 2; J. M. Robertson, *Die Evangelienmythen*, 1910, p. 103; E. W. Riddle, "The Cephas-Peter Problem and a Possible Solution," *JBL*, 1940, pp. 169 ff.

10 K. Holl, *op. cit.*, p. 56; H. Schlier, *op. cit.*, p. 44, n. 3.

11 E. Dinkler, "Die Petrus-Rom Frage," *ThR*, XXV (1959), p. 198.

12 Th. Zahn, *op. cit.*, p. 68, n. 77 and p. 103.

13 Chapmann, "St. Paul and the Revelation to St. Peter, Mat. 16: 17," *Revue Benedictine*, XXIX (1912), pp. 133–147.

14 J. Munck, *op. cit.*, p. 63.

15 A. Vögtle, "Messiasbekenntnis und Petrusverheissung, Zur Komposition Mt. 16: 13–23 par.," *Biblische Zeitschrift*, I (1957), pp. 252–272 and II (1958), pp. 85–102.

16 O. Cullmann, *Petrus*, 1960, p. 19, "*Πέτρος*" *ThW*, VI, p. 100, n. 6.

17 E. Dinkler, "Brief an die Galater, "*Verkündigung und Forschung*, V (1953), pp. 182 ff.

18 E. Dinkler, "Petrus-Rom Frage," *op. cit.*, p. 198.

19 H. Schlier, *op. cit.*, p. 43; J. Munck, *op. cit.*, p. 61, n. 4; Bammel, "*πτωχός*," *ThW*, VI, p. 909, n. 224.

20 G. Klein, "Galater 2, 6–9 und die Geschichte der Jerusalemer Urgemeinde," *ZThK*, LVII (1960), p. 287 f.; *Die Zwölf Apostel* FRLANT, Neue Folge, LIX, 1961, p. 54; "Die Verleugnung des Petrus," *ZThK*, LVII, p. 318.

21 G. Klein, *ZThK*, LVII, p. 297, n. 1.

22 Schlier, *op. cit.*, p. 33, n. 5.

23 最近 K. Heussi の論文 "Galater 2 und der Lebensausgang der Jerusalemischen Urapostel," *ThLZ*, LXXVII (1952), pp. 67–72 (現在は *Die Römische Petrustradition in*

Kwansei Gakuin University
NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Kritischer Sicht, Tübingen; Mohr, 1955, pp. 1–10) が発表されて以後、ἦσαν（過去）と διαφέρει（現在形）及び οἱ δοκοῦντες（現在分詞）の間の時称の相違に注意が向けられるようになった。K、ホイシは ἦσαν は二・九に名をあげられた重だった人たちの死を暗示しているという。そして、彼によると、ヤコブ（二・九）は紀元四九年エルサレムの迫害の際殉教した（行伝一二章）ゼベダイの子ヤコブであり、その後しばらくしてその兄弟ヨハネが死亡した。ペテロの死はコリント第一の手紙とガラテヤ人への手紙の記された大よそ五五—六年頃起ったと思われる。そしてガラテヤ二・一以下はこれらの人々の死亡についての最初の証拠であるという。しかしながら、この一・一九—二・一二の短い文章の間に、もしホイシが示唆するような人物の変化があった場合（即ち一・一九では主の兄弟ヤコブ、二・六及び九ではゼベダイの子ヤコブ、二・一二では再び主の兄弟ヤコブ）パウロはこのことについて一言もふれることなしに、同名の異った人物を書いたとは考えられない。寧ろ、二・六及び九に出て来るヤコブは一・一九及び二・一二に記されているのと同じ人物、即ち紀元六二年大祭司アナナスの処刑により石で打ち殺されて死んダ主の兄弟ヤコブ（Josephus, *Antique*, XX, Chapter 200）であると考えねばならない。そこで、ἦσαν はホイシとは異った意味で理解されねばならない。ホイシに対する批判については

E. Dinkler, "Die Petrus-Rom Frage," *ThR*, XXV (k959), p. 202 参照。

24 H. Schlier, *op. cit.*, p. 43, E. Dinkler, *ThR*, p. 202; A. Schlatter, *Der Galaterbrief* (2d ed.; Stuttgart: Calwer Verlag, 1895), p. 61 参照。なおこれら注解者によっては未だ明確に指摘されていないが、「重だった人々の「曽て」（γοτε 二・六）と教会を迫害したパウロの「曽て」（一二・三、一・一三）とがあざやかに対照されている。

25 C、K、バーレットは終末論的側面のみを強調し、教会的権威に対して持つ意味を評価していない。がこれは正当ではない。C. K. Barrett, "Paul and the 'pillar' apostles," *Studia Paulina* (Harrlem: De Erven F. Bohn, 1953), pp. 1–19.

26 特に、K. Holl, *op. cit.*, pp. 44 f, K. L. Schmidt, *op. cit.*, pp. 303 ff. はこの点正しい。

27 しかるに今日においてもなお、ローマ・カトリック側の学者 P. Gaechter は、ガラテヤ二・一—一〇を次の如く解釈している。「この（パウロ）の派遣は、なお彼らの賛成と認可によるその具体化を必要とした。もしそうでないなら、パウロの訪問は説明されえないで残るだろう……しかし、パウロは自分が神の召命を受けても、なおその事自体において使徒となったのではないことを知っていた。彼はなおもこのためには、そのことに対して権能を持つ人々による正式の派遣を

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

必要とした。*Petrus und seine Zeit* (München: Tyrolia-Verlag), p. 422.

28 C. K. Barrett, *op. cit.*, pp. 3,5 は οἱ δοκοῦντες のすべての用法(二・二、六、九)を皮肉の意味で用いられていると考える Lightfoot, *Saint Paul's Epistle to the Galatians*, London; Macmillan, 1890, p. 108 もこれらを「軽蔑的」な意味で用いられていると考える。これに対し、次の学者はこれを皮肉ではないと考える。Lietzmann, *An die Galater*, 1910, p. 233; E. Dewitt Burton, ICC, 1920, ad. loc.; E. Dinkler, *ThR*, XXV (1959), p. 201. 例えば Dinkler は「皮肉ではなく積極的に考えられている」という。しかしながらパウロの οἱ δοκοῦντες へのすべての箇所(二・二、六、九)を単に、或は皮肉であるとか、反対に皮肉ではないとか、あれかこれかと平板的に割切ってはならない。この点従来の注解は何れも不十分であるといわねばならない。パウロはここで弁証法的に用いている。すなわち、二・二ではエルサレム指導者たちに対して通常用いられている語を単純にとりあげて用いている。しかし、二・六ではこれを明らかに、彼ら指導者たちをパウロに対立させてかつぎあげる人々を考慮して、皮肉の意味で用いている。「かの重だった人たちからは—彼らがどんな人であったにしても、それはわたしには全く問題ではない。」ところが二・九では積極的に、彼らもパウロの福音と使徒的権威を認めざるをえなかった、否、ユダヤ主義者に反対してまでもこれを正しく認め、その権威を正当に行使したのだ、と彼らの権威を肯定して、パウロ自身の正当性を弁護している。

29 Barrett, *op. cit.*, p. 201.

30 E. Dinkler, *ThR*, p. 202.

31 Gクラインがその詳細な研究にもかかわらず、二・六を「神は人間をその外見的欠陥によってはとがめられない」と解するのは適切ではない。*ZThK*, LVII, p. 281.

32 Barrett, *op. cit.*, p. 19, n. 1.

33 A. Schlatter, *op. cit.*, p. 61 はこのところで次のように注解している。「あたかも福音がペテロによって始めて真理となり、有効となり、信じうるようになったかの如き外観は徹底して避けられるべきである。弟子たちは曽てイエスの追随者であり、その説教を聞き、彼の奇蹟、死、復活の目撃者、福音の最初の宣教者であった。がこれらすべては、ここでは考慮されず、彼らの人物に何ら特別の重要性を与えるものではない、とパウロはいう。

34 Cullmann, *op. cit.*, p. 47.

35 パウロが自分をヤコブの指導下にあるペテロと等しいものにすることは何ら意味がない。何故ならそれは自分をヤコブの下に位置づけることになるから。

NII-Electronic Library Service